

28・29 年度ご挨拶（2017 年 7 月）

ささやかな継承者として

歯科心身医学分野

豊福 明

福岡伸一先生の「生命科学の静かなる革命」（集英社 インターナショナル新書）の一節から拝借したフレーズです。

心身医学の、そしてその一分野を担う「歯科心身医学」の継承者の末席を穢す者のひとりとして、とても腑に落ちた言葉です。



（2017 年度の歯科心身医学分野メンバー；寝坊した人が約 1 名いました....）

この 3 月で本学に赴任してもう丸 10 年が経ちました。

What if I had never tried it... (Valentino Rossi)

思ったよりことが進まなかったとも言えますし、望外の成果が上がったとも言えます。今でも自分自身がもっと多くを学び、より多くを吸収したいのはそのままですが、それよりも残された時間とエネルギーを優れた後進の育成にもっとつぎ込みたいという熱望に駆られています。

そもそも僕が歯科心身医学を志し、おずおずと福岡市城南区七隈の福岡大学を尋ねたのが、歯学部5年生の冬、平成元年になったばかりの1月末でした。

卒後は地元で開業するとばかり考えていましたが、臨床実習で歯科心身症の患者さんを目の当たりにした後、恩師の著書「歯科臨床における心身医学-患者と症状の人間的理解」(金原出版)に甚く感銘を受け、歯科にもこういう道があるんだと強く憧れたのがきっかけでした。

その恩師 都 温彦(みやこ はるひこ)先生(福岡大学名誉教授)は、大学院時代に九州大学心療内科の開祖、池見酉次郎(いけみ ゆうじろう)教授の薫陶を受けました。実質的な研究については(同心療内科の開設前から内科領域の心身医学研究が行われていた)九大第1内科臨床心理研究室の小川暢也先生(愛媛大学名誉教授)や深町 建先生の御指導を受けました。

都先生の肝煎りで僕たちも、1内科代謝生理研究室と改称された坂田利家先生(後に大分大学第一内科教授)とその一門の荒瀬高一先生、吉松博信先生、寺田憲司先生、大隈和喜先生、安田弘之先生、小川隆一先生たちの御指導を賜りました。(同研究室の歴史は、心身医 54、78-81、2014 に詳述されています)

九大1内科代謝生理研究室での貴重な学びから、臨床と研究、サイエンスとナラティブとのバランスが非常に大事だと痛感しました。サイエンスだけだと、患者さんを見下す・軽視した冷たい医療になりかねません。逆にナラティブだけだと、口先だけ優しいけど実質が伴わない、いい加減な医療に堕してしまいます。どちらかだけ、では良い医療が成り立ちません。この臨床と研究のバランス感覚は、今でも僕の歯学に対する価値観に強く刷り込まれています。



(歯学部6年生実習風景;質の高い教育・臨床・研究の統合を目指しています)

僕はツイていた、と今さらながら心底思います。師に恵まれ、患者さんにも、周りのスタッフにも恵まれた、と。そして、何より時代にも恵まれました。

例えば本学の教授選がもう少し早くても僕は出れなかったし、もう少し遅くても僕は既に腐っていて・・・とても選ばれはしなかったでしょう。また、そのドン底の時期にも陰日向なく励まして下さった諸先生方がおられなかったら・・・とっくに僕は終わっていました。

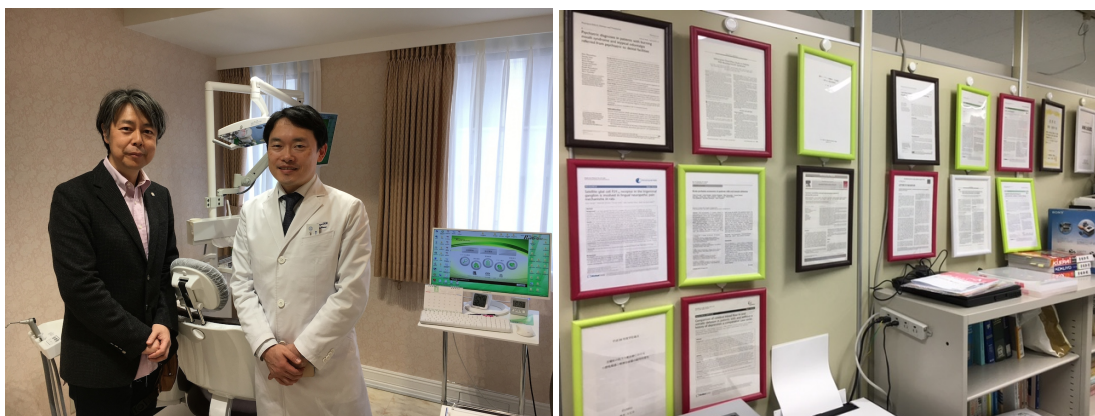
逆に12年前の今月、あのまま全てが望み通りに決まっていたら・・・母教室で順当に昇進していたとしたら・・・きっと僕の驕り高ぶりは手が付けられない程増長し、慢心の極みに達していたことでしょう。そしてそれは教室の衰退だけでなく、僕が最も大事にしてきた“治療の力”も奪っていたことでしょう。

まこと絶妙のタイミングで、うぬぼれや思い上がりに対する戒めの兆候が発せられていたように思えてなりません。

10年前に本学に赴任してゼロから出直し、いろんなことがありました。それでも外来診療は堅調に回り、2年前から入院治療も受け入れ可能となりました。

少しずつですが臨床データをまとめた研究論文・博士論文も出て、臨床と研究ができる人も育つようになってきました。

当分野で10年も熱心に修業した吉川達也先生は、昨年夏に我が国初の歯科心身症専門クリニックを都内に開業しました。



(右：ラクシア銀座歯科クリニックにて吉川先生と。左：少しずつ博士論文も出てきました)

また大学院の卒業生のうち4名は、この5年間に都内4大学の歯学部アカデミックポジション（教職）を獲得しました。彼らがそのうち指導的立場に就き、歯科心身医学の新しい展開を見せてくれたら・・・と夢見ずにはおれません。また先輩に追いつけ、追い越せというような元気な後進の成長も大いに期待しています。



（内科医の長嶺先生を囲んで心電図の勉強会；臨床の実践と研究のヒントに）

ささやかな継承者として、ボクは歯科心身医学の神様に愛されていた、という妄想を抱いてしまいます。もちろん運も大いにあれば、いろいろな方々のお力添えあつてのことです。

実は教授就任以来、こういうチャンスを貰えた意味をずっと考えてきました。

自分がここに居て、何ができるか、何をすべきか？

チャンスを貰ったことに対して、どれだけ価値があることが出来るのか？

歯科心身医学にとっては、臨床が研究であり、研究が臨床となります。様々な症例の診療という実践を積み重ね、その患者さんを理解しようとするところこそが研究となり、日々の診療（診断と治療）の工夫とその評価や病態への考察も研究です。偏差値的知能のみならず人間力が求められます。その人間力を育み学べる環境を整え、歯科心身医学の本質を次世代に受け継ぎ、社会貢献につなげること、それが僕が今しなければいけないことだと考えています。



(写真右；教室研究会の模様、写真左；毎夕の臨床カンファの光景)

当分野の教育とは、決められたコンテンツを覚え込ませることのみではなく、臨床の現場から自分で問題を見つけ、それを解決する力を身につけさせることに重きを置いています。講義や書物はもちろん、臨床現場でしっかりと観察・判断する力を磨き、実践の積み重ねの中で「本当はどうなのか」を思考する力を鍛え抜かなければなりません。

常に自らのアタマで考え、治療の結果を自らの目で確かめる。その治療は本当に良かったと言えるのか？患者さんやご家族はどう感じておられるのか？そんな「本質を考える歯科医師」「こころも診れる歯科医師」を養成すること、が、チャンスを与えられた者の使命だと考えています。

現状に安住することなく、あと10年かけて、キャパシティの高い、バランス感覚の良い後継者を一人でも多く見つけたい、育てたいと考えています。



これまで温かくご支援頂いた方々に深く感謝申し上げますとともに、これからも御指導、御鞭撻を宜しくお願い申し上げます次第です。（2017年7月7日記）